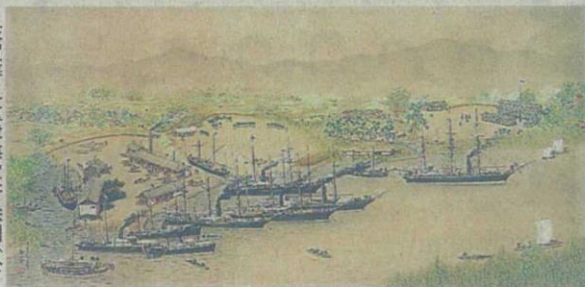


幕末  
佐賀藩

# 近代化のトップランナー①

佐賀藩三重津海軍所絵図(公益財団法人鍋島報効会)



「蒸気罐は御国に於いて初めて製造の事に付、

## 三重津海軍所

(中略) 格別骨折り製造致し候に付、拝領物仰せ付けられ候」

これは文久2(1862)年、江戸幕府による蒸気軍艦千代田形の「蒸気罐」(ボイラー)製造依頼に佐賀藩が応え、幕府が称賛した老中奉書の一文である。日本初のボイラー製造を苦勞の末によくぞ成し遂げた、という幕府の歓喜と佐賀藩への配慮が窺える(『水野忠精幕末老中日記』)。

この前年には、藩がオランダから購入した蒸

県立佐賀城本丸歴史館 学芸員

藤井 祐介

# 初発の技術で幕府を凌駕

気船電流丸の交換用ボイラーを、三重津に製作場を設けて田中久重(東芝の創業者)・儀右衛門父子に製造させていた。つまり、文久年間において、佐賀藩では蒸気機関の要であるボイラー製造を可能としており、日本全体で見ても初発の技術であったことが分かる。

世界文化遺産に登録された「三重津海軍所跡」。この地では、ボイラー製造や洋式船の建造など、修船・造船が行われるとともに、近代的な海軍訓練が実施された。元来、三重津には佐賀藩の「御船屋」が設けられており、和船を保管する場所であった。ところが、10代藩主鍋島直正の主導により、佐賀藩の近代的海軍の拠点となっていくのは、安政5(1858)年に「御船手稽古所」を設置し、翌6年に「海軍稽古場」を拡充してから

のことである。いわゆる《三重津海軍所》の始まりだ。幕府が設けた長崎海軍伝習所で教練を受けた佐賀藩士により、航海術や造船術等が教導され、電流丸等を用いた独自の演習が展開された。

さらに、海軍近代化の一つの到達点とも言える蒸気船建造の動きも本格化した。「成工の自信立つに及んで、進んで造船の業を起す順序を運び」(『鍋島直正公伝』第5篇)と記されるように、

ボイラー製造の成功を受けた佐賀藩海軍の近代化。それが実を結び具体化した場所が《三重津海軍所》であった。佐賀市にある佐賀城本丸歴史館では、23日まで、和空間360度プロジェクションマッピングにより幕末佐賀藩の近代化を紹介する特別展「幕末佐賀藩の挑戦(チャレンジ)」と、凌風丸建造に至るまでの三重津海軍所の変遷を関係資料により紹介する企画展「海外雄飛 関東と三重津海軍所」を同時開催している。世界文化遺産に登録された「三重津海軍所跡」の往時に思いを馳せていただければと思う。

紙面編集・小石克、豊福絵里奈

目読書

目衣食住

目健康・シニア

目文化・学芸

目教育・若者

目趣味・余暇

目文化・学芸

目映画